

# 石坂 公成氏に聞く!

Interview with Kimishige Ishizaka

2006年12月山形県の教育委員長になられた石坂公成氏。照子夫人は山形出身。ふたりは、研究者としてより良きパートナーとして歩んでこられた。どちらかが主でも従でもない対等の関係の夫婦の生き方のヒントとは。

研究者としてアメリカへ  
そして山形へ来るまで

昭和21年、東大在学中に細菌学の実習のため伝染病研究所に行き中村敬三博士と出会う。免疫という生物学的な現象を化学的になしくみて解明するということに興味を持ち、大学卒業後は国立予防研究所に就職。照子夫人とは恩師中村敬三先生を通じた縁で出会い、結婚する。昭和25年、夫人も研究所で働く。昭和32年、二歳になった息子(裕氏)を連れてアメリカに留学。二年後帰国したが、免疫が起る仕組みの研究のために、研究環境の良いアメリカに再び渡ることになる。その後三十余年、二人揃って世界的な免疫学者として実績を残してきた。引退後は山形へと照子夫人との約束を守り帰国後山形市に住まう。山形市の名誉市民でもある。一日の大部分を、難病で寝たきりの夫人の病室で仕事をしながら過ごしている。



■石坂公成 ■1925年生まれ ■免疫学者

## 男女共同参画の「いん」

(インタビューの抜粋)

男性の家事労働や子育ての手伝いについてどう思われますか。

僕はそういう意味では料理も出来ない

し、やったこともないんです。彼女はやらしたこともない。そんなことで手をだしたって、かえって汚すからって。

照子夫人も  
研究で実績を残すことができたポイント。

一つのポイントは要するに男性と女性と同じじゃないと言う事です。日本では何でも同じにしなければならぬと言ってますよね。そんな事不可能ですね。違うということをお互いに理解しなくちゃならない。どうしたら女性を伸ばすことができるかと言ったら、女性には特徴がある訳ですからそういうものを活かす環境に持つていかなければならない。女性は男性に比べているんなことが出来るわけですよ。好奇心がある。そして切り替えがうまい。器用でもある。男性女性に限らず、この人には、どういうことをやらせたいんだらう。どんなアプローチをさせたら夢中になるんだらう。夢中にならないとね、他の人が出来ないような仕事は出来ないんですよ。それが根本的なこと。相手の特徴を活かす。活かされれば楽しいわけでしょう。それはお互いにある。興味だって違う。日本の場合なんでもそうなんだけど平等とか言ってるように出来ないかと資格を認めないわけですよ。ワイクの場合、彼女の希望で8年間フルタ

イムにはならなかった。アメリカではパートタイムだからといって雑用はさせない。その人の能力を一番活かす方法をとる。そのあと彼女はジョンスホプキンス大学に移ると、いきなりアソシエイト・プロフェッサー(準教授)になった。何時間働いたかより、こういう仕事をしている、ということを観る。

女性の能力をもっと伸ばすには。

その人の個性や置かれている環境を認めること。なんでもイコールは不可能ですよ。

照子夫人は「免疫のしくみを研究したい」という夫の思いを受け入れて渡米を決意。夫の石坂氏は「一生勉強したい」という妻の希望が活かされる環境づくりに心を砕きました。

お二人の生き方は実に自然です。妻は夫を思い、夫は妻を思う。それぞれが違う個性であることを認め、お互いが相手を活かす環境を作りあう。その人の為にある時はサポートにまわり、ある時はサポートしてもらわう。これこそ、未来の男女共同参画社会への「道しるべ」だと思えました。

■参考図書

「結婚と学問は両立する」石坂公成著  
市立図書館、男女共同参画センター「フアラ」4階で借りられます。



# 人の役に立ちたい〜二十二歳の転機〜

昨年四月、山形市に初の女性消防士が誕生しました。東京や仙台など人口の多い都市部では、消防士のみならず、救急救命士など、数多く活躍しています。今回、男性と一緒に活躍する一人の女性取材しました。

彼女の名前は須貝可奈さん。山形北高校を卒業して、米沢短期大学に進み、卒業後、消防署総務課の臨時職員(事務員)として一年間働きました。

この臨時職員として働いていたとき、窓から見える消防士に憧れの念を抱き、そして、職員に話を聞くうちになりたい!と思ったといいます。

小さいころの彼女の夢はケーキ屋さん。高校、短大は公務員になりたかったそうです。物心ついたときから、漠然と人の役に立ちたいと思っていたが、具体的なものが見えないまま、働き出しました。そして働きはじめて気づいたものが、人の命を救いたいという、熱い気持ち。それまで漠然としていたものに、一本の道筋が見えました。

一年間の臨時職員としての仕事を終えた後、消防士の試験を受け、四月から九月まで、山形県消防学校で研修を受け、今回お伺いした山形市緑町で十月から山形市消防本部消防署本署消防二部消防係に配属されています。

消防士の仕事は朝の八時半から翌日の八時半までの勤務で、夜中の〇時から朝の六時まで仮眠を取ります。仕事内容は災害現場に出動し、救助することももちろん、

町の安全を守るために、各事業所の立入検査を実施したり、見学に来る幼稚園や小学校の子どもたちに説明をしたりするなど、人との係わり合いが多い仕事です。職場に女性がいることについて、消防署の本署補佐である渡邊さんは、「はじめは、私たちもどう接したらいいのか不安だった。でも本人はもつと不安だらうから、みんなでその不安を緩和しよう!そして彼女を早くいっちょよまえ(一人前)の消防士にさせよう!という気持ちでした。ここ(消防)は、どこの職場よりも面倒見がよく、絆が強い。そのため、職場の習慣や何かが変わったというわけではないが、職場の雰囲気はよくなった気がする。」と話します。

須貝さんも「周りの人が優しく接してくれたため、すぐになじむことができた。」といいます。

### 取材を終えて

消防士さんは私たち一般市民を災害から守ってくれる力強く、頼りがいのある、ヒーローです。そんな中に誕生したヒロインの須貝さんは、自分の目指すものを見つけ、強い意志を持ち、現在の自分に満足しているように見えました。つらいこともあるが、満足度が勝っているように、私も「こんな女性になりたい。」と思わせる女性との出会いでした。



今年1月の出初式での須貝さん



山形市初の女性消防士 須貝可奈さん

